シリーズ 母の教え

人は3歳までに人格が形成されると言われる。その間に一番接しているのは母親。慈愛の心、人としての生き方、仕事への厳しさ……。特に子に対して深い愛情を注ぐ母親は偉大な存在だ。日本を代表する経営トップは母の生きざまから何を学んだのか。それを通じて現在の家庭教育のあるべき姿を考える。

「反対する父を説得し、母が高校進学を勧めてくれたことで、今のわたしがある」

日本における事業所向けコーヒーサービスのパイオニアとして成長してきたダイオーズ。創業者の大久保氏は米屋の長男として誕生。父から「中学卒業後は丁稚奉公へ行け」と言われていた大久保氏だが、「高校くらいは出してやりたい」という母の思いがあって、高校へ進学。母の一言が大久保氏の人生を大きく変えていくことになる――。

ダイオーズ社長
大久保 真一
Okubo Shinichi

浅草の米屋に生まれて

わたしは昭和16年（1941年）、東京・浅草生まれ。父・忠治（ちゅうじ）が24歳、母・静子が22歳の時に生まれました。3人兄妹でわたしが長男、下に妹が2人います。

生まれた年の年末から太平洋戦争が始まりました。父は満州へ行き、家族は父の田舎である栃木県に疎開しました。

わたしが物心ついたのは、終戦後に浅草へ戻ってきてから。浅草全体が空襲によって焼け野原となり、もともとあった校舎や浅草寺の本堂も観音様も皆焼けている。辺り一面がれきの山で、浅草小学校は仮設の校舎で勉強しました。

父は身体を動かすのは大好きだけど、勉強は嫌い。小学校を卒業してすぐに浅草の米屋に丁稚奉公に入り、10年間働きその後、独立したわけです。だから、ソロバンくらいはできるようになれと言われたものですが、勉強しろとは言われたことがありません。

母は逆に物静かなタイプ。当時では珍しく、高等女学校を卒業していて、本を読んだりすることが大好きでした。母には特別な口癖があったわけではありませんし、勉強しろとも言いませんでした。

子供には自由にさせてくれましたので、わたしは子供の頃はとにかく近所を走り回っていた。浅草の三社祭のようなお祭りは大好きで、勉強もロクにせず毎日遊んでいました。

母は大正8年（1919年）、下駄などの履物屋を営む浅草の商家の生まれ。3人姉弟の長女でしっかりものです。当時の世の中というのは、父親の言うことは絶対。ですから、父や夫に対して意見するようなことは一切ありませんでした。

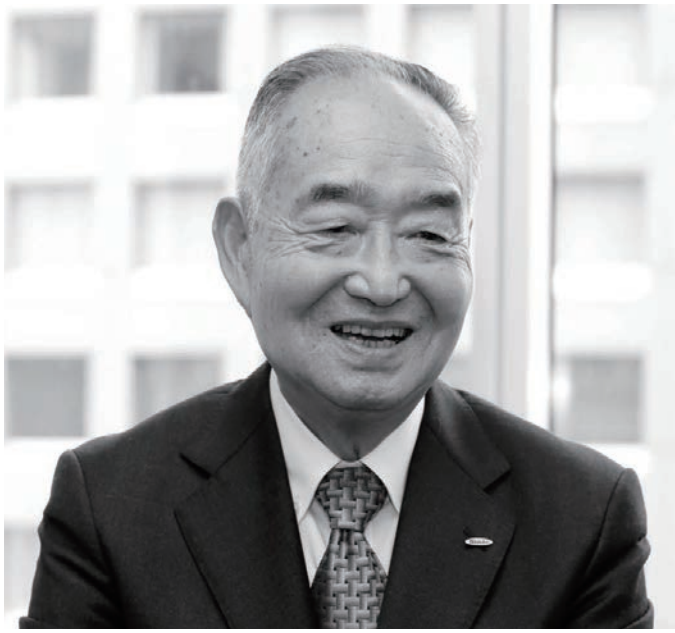
母の父（大久保さんにとっての祖父）もわたしの父同様、丁稚奉公で浅草に来ました。父は日頃、母の家に米の御用聞きに来ていましたので、祖父は父の働きぶりを見ていて、彼は将来有望だと。米屋は独立すると、御用聞きと配達をしなければならないため、家を守る人が必要になります。だから、独立するには結婚するのが一番ということで、祖父が「うちの娘をもらってくれ」と言い出し、二人は結婚したようです。

シリーズ
母の教え 第189回

高校進学を巡って母が初めて父の意見に反対

わたしは小さい時から、父に「お前は中学を卒業したら、商人の町である大阪へ丁稚奉公に行き、将来は家業である米屋を継げ」と言われていました。現在は様々な価値観がありますが、当時、家業は長男が継ぐものでしたから、わたしもそのことに何の疑問もなく育ちました。

ところが、中学3年のある日、母が突然、父に「高校くらい行かせてあげたい」と言い出しました。わたしが進学した中学校は蔵前の問屋街にありましたので、比較的、高校に進学する生徒が多かった。だから、母は知り合いの奥様から、これからは高校に進学して勉強することが大事だよと言われたのです。



おおくぼ・しんいち
1941年3月東京.浅草生まれ。63年中央大学卒業後、読売広告社入社。69年家業の米店に入店し、有限会社米屋おおくぼを創業。76年ダイオー（現ダイオーズ）設立、代表取締役社長。2007年東証一部上場。

ですから、それまで母は父に対して絶対に意見をするというか、異論を挟むことは無かったんですが、ぜひ真一を高校に行かせてほしいと。それを聞いた父はちゃぶ台返しではありませんが、烈火のごとく怒ったそうです。

母は一所懸命に父を説得してくれました。父は渋々認めてくれたのですが、その代わり受験には条件があると。それは都立高校であること、そして、将来米屋をやるんだから商業高校が受かったらということになりました。

当時、都立高校に合格するのは難しかった。父としては、わたしが合格するわけがないと考え、こうした条件を出したのかもしれませんが、ここから母は初めてわたしに勉強しろと（笑）。だから、わたしも必死に勉強して、都立の京橋商業高校に進学することができました。これはわたしの中で非常に大きな自信になりました。

商業学校では、ソロバンや簿記の授業が重要視されます。しかし、わたしはこれだけは得意だったので、高校時代は成績も良かった。それでまた自分に自信を持てるようになりました。

結局、わたしが高校に進学し、その後、大学にまで進学できたのは母のおかげなのです。

一方で父は内心、わたしのことを快くは思っていませんでした。わたしの中に妙な自信が出てきて、わたしが家業を継ぐことよりも、他のことに興味を持ち始めたからです。

わたしは大学卒業後、広告会社に入社します。すると、ある時、これからはチェーンストアの時代が来るということで、通商産業省（現・経済産業省）主催で、チェーンストア経営に成功している欧米の経営者をお招きしての勉強会がありました。

わたしは海外の流通業に興味があったので、勉強会では最前列に陣取り、終了後、機会がある度に「貴社で勉強させて頂きたい」と何度も直訴。その甲斐あって、研修を認めてもらい、

シリーズ
母の教え 第189回

社会人1年目のある日、ご両親と共に

米国や欧州で2年間の海外研修に行かせてもらうことができました。

実は実家に戻ることになったのは、これが転機です。

わたしは当時、すでに結婚しており、長男が生まれたばかりでした。ところが、わたしはせっかく海外に行けるチャンスを掴んだので、どうしても行きたかった。そこでわたしが日本を離れる間の2年間、家内と息子を実家に預かってもらおうと考え、両親にお願いしました。

わたしは親の前で「これから欧米を訪問し、最先端の流通業を勉強してくる」と。その間、二人を預かってくれるようお願いし、「その代わり、帰ってきたら米屋をやる。そして、我が家を日本一の米屋にする」と約束したのです。

すると、わたしに家業を継いでもらいたかった父は「分かった」と言って、二人を預かることを承諾してくれました。これには母もビックリしたと思います。

この頃、渡米すると言っても、飛行機の直行便はありません。プロペラ機で2回は経由地に立ち寄らなければならなかったし、片道の航空運賃が広告会社の給料の半年分かかりました。

当時は初任給が1万9千円。4年目のわたしがもらっていたのが約3万円で、とてもじゃないが払えません。一番安いのが貨物船の船底で、それでも3カ月分くらい。父はわたしが家を継ぐと言ったことが嬉しかったのか、この船賃を払ってくれました（笑）。感謝しています。

帰国後、わたしは1969年に米屋おおくぼを設立。米屋の御用聞きと配達という特色を活かした新規事業に着手し、顧客ターゲットを家庭からオフィスへ転換。1977年に日本初のオフィスコーヒーサービス事業を開始し、今日に至っています。

丈夫な身体に産んでくれたことに感謝

母は58歳で亡くなりました。40代半ばから病気がちで、最終的にはがんになり、10年以上闘病生活をしていました。入退院を何度も繰り返して、ずいぶん苦労したと思います。

父は73歳で亡くなったのですが、母とは違って、最後まで元気でした。

当社のアメリカ事業が軌道に乗り始めた頃で、ダイオーズのフランチャイズ（FC）オーナーと共にアメリカへ視察に行く事になり、父も同行することになりました。そこで父は初めてパスポートを取得し、初の海外旅行ということで、父はかなり楽しみにしていました。

ところが、いざ出発となる前日、脳溢血で突然帰らぬ人となったのです。そのため、アメリカに先乗りしていたわたしも急いで日本に戻りました。だから、母と逆で闘病生活もなく、父らしい最期だったなと思います。

今回の企画『母の教え』は、経営者個人の母親にスポットをあてたものだと思いますが、企業にとっても先輩方の教えや考えを受け継ぎ、次の世代に伝えていくことは大事なことです。

そのため、最近はできるだけ、創業者のわたしが現在どのような考えで行動し、経営しているかを社員に理解してもらえるよう、企業理念や様々な情報をネットで配信するようにしています。わたしにとって社員は家族のようなもの。理念や考え方の共有は社内の一体感を生み出す上で非常に大事だと思います。

わたしはすでに80歳になりましたが、おかげさまで未だにお医者さんにかかったことはありません。これも丈夫な身体に産んでくれた母のおかげです。これからも母への感謝を忘れず、健康に留意して、会社を成長させていきたいと考えています。